

自治労第5回現業政策集会一分科会概要一

清掃分科会

タイトル
清掃職場における災害対策 ～その課題と展望について～
開催趣旨
<p>近年、全国各地において甚大な被害を及ぼす災害が多く発生しています。昨年1月に発生した能登半島地震では、発災後、全国各地から清掃職員を含め多くの自治体職員が復興支援に駆けつけています。しかし、この間の合理化攻撃や採用抑制によって現場を熟知した職員の減少により、現地での的確な指示・命令系統が十分に機能・発揮できず、その結果、災害廃棄物処理の遅れ、また復興の遅延が生じるなど、支援・受援側ともに様々な課題が浮き彫りとなりました。</p> <p>私たちが働く清掃職場では、平時はもとより、非常時において廃棄物処理を確実に遂行するためにも、各自治体において災害マニュアルを作成し、被災した際の迅速で効果的な災害対応および、確実な災害復興支援が求められます。そのため、交渉においては災害時の直営職員の重要性を認識させ、新規採用や処遇改善を勝ち取っていかねばなりません。</p> <p>今分科会で、災害時における廃棄物行政を担っていくため、全国の清掃職場の仲間からこれまでの災害時の課題や先進的な取り組みを共有し、学び合う中から、これからの単組・職場での運動の前進につなげよう。</p>

学校給食分科会

タイトル
子どもたちのための「安全で安心な学校給食」をめざして ～子どもたちの未来にむけて、オーガニック給食について給食調理現場から考える～
開催趣旨
<p>近年、食に関する課題として遺伝子組み換えや表示偽装食材の問題、さらには残留農薬や食品添加物の問題が学校給食の提供にも影響をあたえています。改めて、現場の最前線で働く私たち給食調理員には、子どもたちに「安全で安心な学校給食」の提供が求められています。</p> <p>最近では、国による支援の対象となったことにより、有機食品を使用したオーガニック給食に取り組む自治体は少しずつ増えています。この有機食品を使用したオーガニック給食は、子どもたちに「安全で安心な学校給食」を提供するだけでなく、生産から消費まで一貫した取り組みを地域で行うことにより「食育の推進」「環境負担の低減」「地域の活性化」などに通ずるものとされています。今こそ、再公営化にむけ「子どもたちの食の安全」と「私たちの職の確立」をめざし、給食調理現場からオーガニック給食について考えます。</p>

学校用務分科会

タイトル
防災拠点として何ができるのか？ ～避難所指定である学校現場で私たちだからできること～
開催趣旨
災害には事前の対策が重要であるため、普段からどのような準備をすれば防災・減災につながるかをテーマに分科会を開催します。 避難所指定の学校が増加する中、防災施設として、いつでも避難所の役割を果たせる状態を維持しているか、また、どのようなものがあれば災害時に役に立つかなどを共有し、災害時における用務員のあるべき姿について考えます。 災害時に避難所の開設や運営に携わった事例の報告を踏まえ、災害時に用務員がどのような役割を持ち、どのように動くかなどを事前に想定できるよう、「必ずいつか役に立つ時が来る」ということを前提に、具体的な議論を深めていきます。 自然災害はいつ、どこで起こるか分からないため、災害時における用務員の役割を明確にした上で、用務員配置の有無の学校の課題を洗い出し、共有化することにより、今後の各現場での配置基準の見直しや適正化、さらに正規職員採用の道へとつなげていきます。

県職現業分科会

タイトル
県職現業の業務と果たすべき役割とは ～私たちは地域住民にとって重要な役割を担っている～
開催趣旨
県職現業が担っている業務内容は多岐に渡り、地域住民の生活に必要な業務を担っており、とりわけ災害時では道路管理者としての対応をはじめ、被災自治体への派遣対応など極めて重要な役割を果たしています。そのためには、提供体制の維持・拡充が重要ですが、各職場では多くの課題が山積しています。 課題の1つである高年齢者の働き方においては、職種によって業務量の調整が困難であるため、高年齢者への負担が大きいことから、誰もが働き続けられるとともに、やりがいももてる業務が求められます。 質の高い公共サービスの提供にむけ、県職現業が果たす役割を確実に実行するために技術の継承は必要不可欠であることから、すべての職種で新規採用を勝ち取るとともに、課題が生じている際は、再公営化にむけて新たな職域の拡大などの議論を行い、取り組みにつなげていきます。

一般現業分科会

タイトル
職場の当たり前を疑ってみよう ～日常業務における心構えで職場を変えることができる～
開催趣旨
<p>職場環境に対して要望や改善点は数多くあります。毎日行う業務内容では慣れが生まれ、危険が潜んでいるにもかかわらず、「これが当たり前」「この手順で教えてもらった」などを理由に、十分に意識もせず、業務を行っていることも見受けられます。職場環境の改善にむけ、みんなが「物言える労働者」であれば良いのですが、実際は「物言える労働者」ではなく、「ただ働かされている人」になっているのではないかと、という自問が必要です。</p> <p>業務内容の進め方、さらには業務のあり方に至るまで、日常業務において少しでも意識していけば、必ず職場環境の改善につながると考えます。日常業務に追われるとともに、月日を重ねる事により、薄れていくこうした意識を再び気付く方法として「職場の当たり前を疑ってみる」というのはいかがでしょうか。</p> <p>私たちの能力を最大限に発揮した上で、より付加価値の高いサービスの提供にむけ、日常で働く中で感じている自己犠牲や自己責任を洗い出し、自分自身をブラッシュアップしていきましょう。</p>